

# 『諸厄利亜語林大成』と『英和对訳袖珍辞書』に

## 見る黎明半世紀の英学の進展

三好 彰

キーワード: 諸厄利亜語林大成、英和对訳袖珍辞書、  
英和辞書、オランダ語

### 要旨

西暦 1814 年に作られた英和辞典『諸厄利亜語林大成』と半世紀後の西暦 1862 年に市販された『英和对訳袖珍辞書』の邦訳は、英語の見出し語に対応するオランダ語訳から得られたとこれまで考えられてきた。しかるに『諸厄利亜語林大成』の編纂責任者である本木正栄はオランダ語に拠ったものでは疑義が生じ得ることを指摘している。本木は具体例を示していないが、いかなる場合に不具合が起こり如何にして乗り越えたのかを本稿で明らかにした。

本木等が乗り越えたこの問題が『英和对訳袖珍辞書』でも解決できているが、そのほかに動詞の扱いなどに英学の進展が見られる。そして英語を外来語として取り込んで辞書としての利便性が高まっている。

### 1. はじめに

我が国が公式に英語に取り組むことになったきっかけは文化 5 年 (西暦 1808) に英国船フェートン号が長崎港に乱入した際に、それまで学んできたオランダ語が役に立たなかったことであつた。幕府は通詞に英語を学ぶことを命じた。先生役は長崎のオランダ商館に勤務していたオランダ人ブロンホフ Jan Cock Blomhoff であつた(勝俣銓吉郎 (1936)、古賀十二郎 (1947))。

そして 1814 年 (文化 10 年) に世界初の英和辞書である『諸厄利亜語林大成』(本木庄左衛門 (正栄) 編 (1814)) がオランダ通詞の本木正栄が責任者となって編纂され幕府に献上された<sup>1</sup>。この辞書は刊行されなかったが『諸厄利亜語林大成』の草稿が長崎県立歴史博物館に現存している(本木正栄 (1982))。この草稿は英語の見出し語に対応するオランダ語訳をつけて邦訳語が書かれており、オランダ通詞がオランダ語を介して英語を学んだことを端的に示している。

ところが、この辞書の叙(序文のこと)に本木は次のように書いている。

諸厄利亜所有の言詞悉く纂集譯釋し傍ら参考するに和蘭の書を以てし猶其疑きものは佛郎察の語書を以て覆譯再訂し遂に翻して皇国の俗言に歸會し (後略)

つまりオランダ語だけでは解決できないことがあり、その場合はフランス語に拠ったと言う。本稿はオランダ語を介したのでは英和辞典が作れないと本木が指摘した問題点を解き明かす。

<sup>1</sup> 献上された原本は現存しないが、写本が静嘉堂文庫所蔵 (大槻文彦旧蔵) と鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫 (島津久光旧蔵書) に存在する。

さらに、この問題が『諸厄利亜語林大成』が編まれてから半世紀後の文久2年（西暦1862）に出版された『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編（1862））でどのように取り扱われているかを検証する。なお『英和对訳袖珍辞書』は最初に市販された英和辞書である。

そして『諸厄利亜語林大成』から『英和对訳袖珍辞書』までの英学黎明期半世紀間で英語の理解が深まったことを示す諸点を例示する。

なお『英和对訳袖珍辞書』と『諸厄利亜語林大成』は熟語（イディオム）を見出し語と同等に取り扱っているため、本稿では見出しの英単語と熟語を併せてエントリーと呼ぶ。

## 2. 『諸厄利亜語林大成』と『英和对訳袖珍辞書』の品詞の扱い

『諸厄利亜語林大成』草稿の英語のエントリーの一例として Entry を取り上げると、次のようである。

Entry. <sup>エンティリ</sup> *ingang, intrede* <sup>イリキタル</sup> 入来 <sup>シュクイリギヤウレツ</sup> x 入國儀従 <sup>イリクチ</sup> x 戸

英語 Entry の発音がカタカナでエンティリと書かれており、そのオランダ語訳が2つ(*ingang, intrede*)、そして邦訳語が3つ(入来、入國儀従、戸)書かれている。

『英和对訳袖珍辞書』では Entry は次のようである。

Entry, s. 入り口、入り来ル<sup>ㄱ</sup>、帳面ニ記ス<sup>ㄱ</sup>、先ニ飾リ付テアル食物

ここで s. は実名詞 Substantive の略であり<sup>2</sup>、邦訳が4つ書かれている。

『英和对訳袖珍辞書』にはエントリーの発音が書かれておらず品詞が示されているのが『諸厄利亜語林大成』との違いである。ただし『諸厄利亜語林大成』では動詞は原則として原形に To が付けられていて(柴田篤志 (2011))それと分かる<sup>3</sup>、なおその語順は原形の綴りによっている。

『英和对訳袖珍辞書』の底本(三好彰 (2012b))である Picard (1857) は動詞を除いて品詞の区別をしている。動詞のエントリーは次のように活用形を示しているため動詞だと識別できる、しかし自動詞と他動詞の区別をしていない。

規則動詞の1例 Enter, -ed, -ing

不規則動詞の1例 Go, went, gone, going

なお『諸厄利亜語林大成』では動詞の活用系は別のエントリーになっていて原型との関係が記されていないので分かりにくい。たとえば Go の過去分詞 gone は次のように書かれているだけである。

<sup>ゴン</sup> gone *gegaan* 己往 ユケリ

2 『英和对訳袖珍辞書』は「畧語ノ解」として次のように見出し語の品詞を略号で示している。

略号	adj.	adv.	art.	conj.	interj.	prep.	pron.	s.	v. a.	v. n.
品詞名	形容辞	副辞	冠辞	接續辞	間投辞	前置辞	代名辞	實名辞	他動辞	自動辞

本稿で略号はこれに準ずるが品詞の名称は原則として学校文法に拠り、たとえば形容辞は形容詞とする。

3 『諸厄利亜語林大成』には To が付されていないが動詞と認識されているのが管見で38エントリーある。その1例である discover を以下に示す。

<sup>ディスコーフル</sup> discover *ontdekken* 観発 <sup>ミアラウス</sup>

『英和对訳袖珍辞書』では次のようであり、自動詞と他動詞を区別している。

Enter-ed-ing, v. a.	入り来ル、進ム、書記ス、渡ス、渡ル
Go, went, gone, going, irr. v. n.	行ク

このように『英和对訳袖珍辞書』は『諳厄利亜語林大成』と違って品詞の重要性を認識しており、特に Picard (1857) と違えて自動詞と他動詞の区別をしている。さらに Picard (1857) に見られない不規則動詞を示す略号 *irr.* も入れており、ここにも英学の進展が見られる。

『諳厄利亜語林大成』は叙で英文法を説いており自動詞と他動詞の区別を含めて品詞を理解していたが、各エントリーに品詞の表示をしていなかった。これは利用できた英蘭辞書に準じたためかもしれない。ちなみに英蘭辞書である Sewel (1766) は『諳厄利亜語林大成』と同じようにエントリーに品詞が示されておらず、動詞は原形に To が付けられているが自動詞と他動詞の区別は無く、これらの特徴は『諳厄利亜語林大成』と同じである。そして Sewel (1766) とともに幕末に将来していた Holtrop (1801), Bomhof (1851) の英蘭辞書ではエントリーに品詞を示しており、自動詞と他動詞を区別しているのは『英和对訳袖珍辞書』と同じである。Picard (1857) はポケット型の辞書なので簡便化を図ったと考えられる。

『諳厄利亜語林大成』がエントリーに品詞の区別を示していないために同じ綴りで複数の品詞になるエントリーの邦訳に『英和对訳袖珍辞書』と差が出る。その1例だが、英語のエントリー red は両辞書で次のようである。

『諳厄利亜語林大成』	<sup>レット</sup> red	赤色ナル
『英和对訳袖珍辞書』	Red, <i>adj. et s.</i>	赤キ、赤色

なお Red のオランダ語訳は『諳厄利亜語林大成』と『英和对訳袖珍辞書』の底本である Picard(1857) でともに rood である。『諳厄利亜語林大成』は名詞の Red を邦訳できていない。

『英和对訳袖珍辞書』が品詞の区別をしているのは底本 Picard (1857) に拠ったわけだが、Picard (1857) が自動詞と他動詞の区別をしていない点を見直しているのは特筆に値する。英語の動詞で同じ綴りで自動詞と他動詞になるものがあり、オランダ語訳も自動詞と他動詞で綴りが変わらないが、日本語では自動詞と他動詞で表現が異なることを『英和对訳袖珍辞書』の編纂者が承知していたわけである。ここに英学の進展が見て取れる。

### 3. エントリーとオランダ語訳

筆者は『英和对訳袖珍辞書』とオランダ語との関係を先の報告(三好彰(2012b))で明らかにしたので、同様の手法で『諳厄利亜語林大成』について考察する。

#### 3.1 『諳厄利亜語林大成』のエントリーとオランダ語訳の訳数

Entry の場合 2 つのオランダ語訳が与えられているが、『諳厄利亜語林大成』のすべてのエントリーについてオランダ語訳の個数がどのように分布しているか調べたところ表 3.1 のようであった。

表 3.1 『語厄利亚語林大成』のエントリーに  
対するオランダ語訳数の分布

オランダ語訳の数	件数	比率
0	4	0%
1	4,559	77%
2	1,152	19%
3	169	3%
4 以上	31	1%

表 3.1 でオランダ語訳の数が 0、つまりエントリーにオランダ語訳が与えられていないのが 4 件あるが次のようにいずれも邦訳語が与えられている。

アーント ヲフ デ ハードルス シストル aunt of the father's sister	叔祖母 チチカタヲバ
アーント ヲフ デ モードルス シストル aunt of the mother's sister	従母 ハハカタヲバ
To be	余皆倣之
ベホルディン beholding	委 ユタヌル

”To be able” から “To be wise” までの 17 のエントリーが “To be” の用例として書かれていて、その他の “To be” の用例もこれに倣うことを漢語表現で「To be 余皆倣之」と書いている。なお、この To be に発音は書かれていない。

beholding にオランダ語訳が書かれていないのは単純な書き落としと考えられる。

比較のために『語厄利亚語林大成』のエントリーに対応する『英和对訳袖珍辞書』のエントリー<sup>4</sup>を取り出して、底本である Picard (1857) が与えているオランダ語訳の語数の分布を調べた結果を表 3.2 に掲げる。

表 3.2 『語厄利亚語林大成』対応する『英和对訳袖珍辞書』  
におけるエントリーのオランダ語訳数の分布

オランダ語訳の数	件数	比率
0	43	1%
1	1,911	39%
2	1,247	26%
3	739	15%
4	387	19%
5	188	4%
6 以上	287	7%

<sup>4</sup> 『語厄利亚語林大成』のエントリーに対応する『英和对訳袖珍辞書』のエントリーとは、たとえば『語厄利亚語林大成』の動詞 To abandon を『英和对訳袖珍辞書』の Abandon-ed-ing, v.a. に対応させたことを指す。それぞれのオランダ語訳は次の通りであり、その語数が異なっている。

To abandon	verlaaten
Abandon-ed-ing, v.a.	vergeven, overlaten, ter prooi geven, verlaten, verzaken, opgeven, laten varen

なお『語厄利亜語林大成』では動詞の原形と過去および過去分詞がそれぞれ別のエントリーとなっているが『英和对訳袖珍辞書』では1つのエントリー<sup>5</sup>なので、これらに対応する『英和对訳袖珍辞書』のエントリーは重複勘定(ダブルカウント)しないようにした。

表 3.2 でオランダ語訳の語数が 0 なのは、たとえば "Bolsprit, see Bowsprit" のように異形表現の同義語が別にあることを示してオランダ語訳を与えていない場合である。

### 3.2 『語厄利亜語林大成』の複数のエントリーが同一のオランダ語訳に対応するケース

表 3.1 で分かるように英語のエントリーとそのオランダ語訳とが 1:1 の関係にあるのが 77% にもなるが、その中に複数の英語のエントリーが共通の 1 つのオランダ語訳になっているのがある。たとえば 2 つのエントリー Side と Silk のオランダ語訳はともに *zijde* であり、Side と Silk はそれぞれ *zijde* と 1:1 になっている。つまり Side と Silk という 2 つの英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳 *zijde* を共通に持っている。

このように英語のエントリーに対して与えられているオランダ語訳が 1 つだけのケースにおいて、同一のオランダ語訳を持つ英語のエントリーの件数の組の数は管見では次の通りである。

- (a) 2 つのエントリーが共通のオランダ語訳を持つケース : 335 組(670 エントリー)
- (b) 3 つのエントリーが共通のオランダ語訳を持つケース : 42 組(126 エントリー)
- (c) 4 つのエントリーが共通のオランダ語訳を持つケース : 6 組(24 エントリー)
- (d) 5 つのエントリーが共通のオランダ語訳を持つケース : 1 組(5 エントリー)

組の数を総計すると 384 組となる。これらの組はオランダ語訳が同じで邦訳の意味が同じものと、邦訳の意味が相異なるものに二分される。

#### 3.2.1 『語厄利亜語林大成』でオランダ語訳が同じで邦訳の意味が同じである組

オランダ語訳が同じで邦訳の意味が同じである組の 1 つの例として、(d) の 5 つものエントリーが 1 つのオランダ語訳を持っている組を取り上げる。そのエントリーとオランダ語訳、そして邦訳は下記のようなものである。

ブ ロ ウ blow	slag	打撲	ウツ
ク レ ッ プ clap	slag	撲	ウツ
レ ス lash	slag	打擲	ウチタタク
ス ト レ イ フ stripe	slag	叩打	ウチ
ス ト ロ ー ク stroak × stroke	slag	打撲	

オランダ語 *slag* から邦訳を得て、日本語の表現がこのように異なっているものの意味は「打つ」で同じである。384 組の内の 333 組はこのケースのようにオランダ語訳が同じで邦訳の意

<sup>5</sup> 1 例として動詞 do の過去 did 又 dit、過去分詞 done および進行形 doing は『語厄利亜語林大成』ではそれぞれ別のエントリーである、なお dit は did の古い時代の綴りであり『英和对訳袖珍辞書』には採録されていない。

『英和对訳袖珍辞書』では、これらは次のように 1 つのエントリーである。

Do, did, done, doing, irr: v. a.

味が同じものである。

### 3.2.2 『諸厄利亜語林大成』でオランダ語訳が同じだが邦訳の意味が相異なる組

3.2.1 とは違ってオランダ語訳は同じだが邦訳の意味が相異なる組がある。そのような組の数は同一のオランダ語訳を持つ英語のエントリーの組の総数 384 組から、上述したオランダ語訳が同じで邦訳の意味が同じである 333 組を除いた 51 組である。

オランダ語には同じ綴りで複数の品詞になることが少なからずあるのだがオランダ語訳が同じである 2 つのエントリーの品詞が異なるために邦訳が異なる 10 のケースと、品詞が同じであって邦訳の意味が異なる 41 のケース（その内の 1 ケースは誤訳）があるので、それぞれのケースについて例示する。

(i) オランダ語訳が同じである 2 つのエントリーで品詞が異なり邦訳の意味が異なるケース

『諸厄利亜語林大成』でオランダ語訳が同じである 2 つのエントリーで、その品詞が異なっており、そのために邦訳の意味が異なっているケースが 10 件ある。その 1 例を下記に示す。

<sup>プール</sup> poor	arm	貧窮ナル
<sup>エルム</sup> arm	arm	肘 撃

オランダ語訳の *arm* には名詞と形容詞の 2 語がある。『諸厄利亜語林大成』ではエントリーに品詞が示されていないのだが、英語 *poor* を形容詞、英語 *arm* を名詞と正しく識別した邦訳になっているので、このケースもフランス語を利用して訳し分けたと考えられる。

(ii) オランダ語訳が同じの 2 つのエントリーで品詞も同じで異義だが正しく訳しているケース

『諸厄利亜語林大成』でオランダ語訳が同じである 2 つのエントリーで、その品詞が同じであって邦訳の意味が異なっているが正しく訳し分けられているケースが 40 件ある。上述した *Side* と *Silk* がその例であるが、邦訳とともに記すと次のようである。

<sup>セイデ</sup> Side	<i>zijde</i>	<sup>ワキ</sup> 脇	×	<sup>ソバ</sup> 側	×	<sup>ホドリ</sup> 邊
<sup>シルク</sup> Silk	<i>zijde</i>	絹				

このように *Side* と *Silk* のオランダ語訳はどちらも *zijde* で同じだが、邦訳が「脇 × 側 × 邊」と「絹」と意味が異なっている。ちなみに現代の『オランダ語辞典』（日蘭学会 (1994)）は蘭英辞典を基にしているのだが、それによってもオランダ語 *zijde* が英語の *Side* と *Silk* の両方の意味を持っていることが分かる。それゆえオランダ語 *zijde* をひねくり回しただけでは *Side* が「絹」でなくて「脇 × 側 × 邊」であり、*Silk* が「脇 × 側 × 邊」でなくて「絹」であると訳し分けることはできない。

つまり、このケースではオランダ語 *zijde* が英語から見ても日本語から見ても多義であるために、このオランダ語 *zijde* から英語の意味に合った日本語を対応させることができない。そこで本木等は叙に書いているようにフランス語を利用したと考えられる。本木がフランス語のどの典拠に拠ったのを明記していないので不明だが参考のために現在の簡便な英仏辞典によると、

Side と Silk はそれぞれ côté と soie という別のフランス語に該当している。本木等は英語に先立ってフランス語を学んでいた(杉本つとむ(1978))ので、soie は「絹」であって「脇<sup>ワキ</sup> × 側<sup>ソバ</sup> × 邊<sup>ホドリ</sup>」ではなく、côté は「脇<sup>ワキ</sup> × 側<sup>ソバ</sup> × 邊<sup>ホドリ</sup>」であって「絹」でないというように英語の意味に合う日本語を選び出すことができたと考えられる。

さて『英和対訳袖珍辞書』で Side と Silk は下記のようにあり、こちらも問題無く訳し分けられている。

Side, s.	側面、味方
Silk, s.	絹

### (iii) オランダ語が多義であることに気付かないで誤訳になったケース

『語厄利亜語林大成』で2つのエントリーでオランダ語訳が同じであって、そのオランダ語が多義であることに気付かないで誤訳になっているのが1組だけある。その2つのエントリーを次に示す。

<sup>サーベル</sup> sable	sabel	片刃鋏
<sup>スキミテル</sup> scimitar	sabel	片刃劔 <sup>カタハノケン</sup>

オランダ語 *sabel* は男性名詞でサーベル(軍刀)と中性名詞でクロテンの皮の両義がある。英語の *sable* にはクロテンとクロテンの毛皮の意味であり軍刀の意味は無い。そして英語 *scimitar* はシミタール刀というアラビア・ペルシア起源の湾曲した新月形の片刃刀のことであってクロテンの毛皮の意味は無い。それゆえ *scimitar* を「片刃劔 <sup>カタハノケン</sup>」としたのはよいが、*sable* を「片刃劔」としたのは間違いである。フランス語では *sable* を *zibeline*、*scimitar* を *cimeterre* と言うのでフランス語なら両者を区別できる。本木等はこのケースではフランス語を利用しなかったので誤訳になったわけである。

ちなみに『英和対訳袖珍辞書』では次のように正しく訳し分けられている。

Sable, s.	獣名 × 其獣ノ皮
Scimitar, s.	脇差、刀

### 3.2.3 多義であるオランダ語訳を持つ単発の『語厄利亜語林大成』のエントリー

或るオランダ語訳が『語厄利亜語林大成』の複数のエントリーに出てくる場合はそのオランダ語の多義性に思いが及びやすいが、1つだけのエントリーにしか出てこないオランダ語訳にも多義なのがあることにも留意すべきである。管見では400以上ものオランダ語訳がそれに該当する。その1例に下記の *rose* がある。

<sup>ローズ</sup> rose	roos	薔薇 茨イバラ
------------------------	------	---------

オランダ語の *roos* にはバラと丹毒の両義があるが、英語の *rose* に丹毒の意味は無い。つまり多義であるオランダ語に惑わされなく英語のエントリーに合った邦語を充てている。

さて『語厄利亜語林大成』は400以上もの多義のオランダ語を有する類例のケースで *rose* のように英語エントリーに合った邦語を得ているので、この場合も本木等はフランス語から邦語を得たわけである。ただし下記の3つのエントリー (*ancl*, *awl*, *shovel*) はオランダ語訳の多

義性に紛らわされた誤訳になっている。

● エントリー <sup>エンケル</sup> **ancl**

エントリー **ancl** は **ankle** の古語であるが、オランダ語訳は *enkel* であり、邦訳は「単 ヒトエナル」である。オランダ語 *enkel* には名詞で「足首、くるぶし」の意味と、形容詞で「単一の、少数の」の意味とがある。英語 **ancl** の意味は「足首、くるぶし」であるから「単 ヒトエナル」は誤訳である

● エントリー <sup>アウル</sup> **awl**

エントリー **awl** のオランダ語訳は *els* であり、邦訳を「樹名」としている。オランダ語 *els* に「ハンノキ」と「錐」の意味があるので「樹名」は「ハンノキ」を想定したようだが、英語 **awl** は「(靴屋などが用いる)突きぎり」のことなので誤訳である。

● エントリー <sup>ソフル</sup> **shovel**

エントリー **shovel** のオランダ語訳は *schop* であり、邦訳を「踢 <sup>ケリ</sup>」としている。オランダ語 *schop* には「シャベル、スコップ」の意味と「蹴る、キック」の意味があるが、英語 **shovel** は「シャベル、スコップ」のことであるから「踢 <sup>ケリ</sup>」は誤訳である。ちなみに「スコップ」はオランダ語 *schop* のことであり外来語として定着している。

なお、これらの3つのエントリーを『英和对訳袖珍辞書』は次のように正しく邦訳している。

Ankle, s.	踝
Awl, s.	履作りノ用ユル大針
Shovel, s.	大杓子ノ類

### 3.2.4 多義であるオランダ語訳への『諸厄利亜語林大成』の対応の総括

英語のエントリーに対応するオランダ語訳には英語と日本語から見て多義なものがあり、上述したように『諸厄利亜語林大成』では多義に紛れて4つのエントリー(*sable*, *ancl*, *awl*, *shovel*)を誤訳している。

ところで『諸厄利亜語林大成』に出ている多義なオランダ語訳を持つ51組のエントリーのすべてを『英和对訳袖珍辞書』で検証したところ誤訳は1つも見当たらなかった。しかし先の報告(三好彰(2011b))で明らかにしたように、『英和对訳袖珍辞書』の草稿(名雲純一編(2007))にはオランダ語訳に拠ったために誤訳になっているのがあり校正の段階で英語の意味に合うように改訂している<sup>6</sup>ことから、『諸厄利亜語林大成』の知見が継承されていたのではなく辞書編纂の途上で独自に得た知見、つまり再発見だと考えられる。編纂の最初から分かっていたわけでないためだろうが『英和对訳袖珍辞書』にもオランダ語の多義性に気が付かないで誤訳になっているのがある。現在なら「ヨット」と訳す *Yacht* を「狩」とし、「海軍少将」の意味の

<sup>6</sup> 1例として英語 *Dangle* を取り上げる。『英和对訳袖珍辞書』の草稿(名雲純一編(2007))はその邦訳の1つを「スリンゲル」ニテ石ヲ投ル」としている。Picard(1857)が *Dangle* のオランダ語訳を *slingeren* としており、これに『和蘭字彙』は「スリンゲル」ニテ石ヲ投ル」と「ユサブル」の両義を与えている。このうちの前者を取ったわけだが英語 *Dangle* に「石を投げる」という意味はない。草稿に朱で訂正が入っており英語 *Dangle* の意味に合う「動揺スル」に訳し直している。オランダ語だけではこの校正の妥当性は評価できない、英語の意味に拠った校正であることを示めている(三好彰(2011b))。

Rear-admiral を「産婆」としているのがその例である (三好彰 (2012b))。

### 3.3 オランダ語訳から分かる英語の古語

『諸厄利亜語林大成』の英語のエントリーと邦訳の関係で不可思議なのが 2 つあるが、オランダ語訳からその原因が分かる。それはエントリー *desert* と *waste* である。

エントリー *desert* の邦訳が「<sup>デザート</sup>三薦 饗宴第三番ノ食薦 × 餅果同称」となっている。そのオランダ語訳は *laatste geregt, banket* であり、これを直訳すると「最後の食事、ケーキ」となるのでエントリー *desert* に疑問が湧くのだが OED (2009) によると *desert* は *dessert* 古い時代の綴りだと分かる。つまり現在のデザートのことである。

エントリー *waste* の邦訳が「<sup>ウェスト</sup>中體」となっている。そのオランダ語訳は *middel* であり、これは「胴」のことなのでエントリー *waste* に疑問が出る。しかし OED (2009) によると、*waste* は *waist* の古い時代の綴りだと分かる。つまり現在のウェストのことである。

この両エントリーの場合、オランダ語訳が無ければ邦訳は誤訳と片付けられかねない。ところで『英和对訳袖珍辞書』には *dessert* の意味の *desert* と *waist* の意味の *waste* は採録されていないので、底本である Picard (1857) が編纂された 19 世紀半ばには *dessert* の意味の *desert* と *waist* の意味の *waste* は使われなくなっていたと考えられる。

このほかにも『諸厄利亜語林大成』には『英和对訳袖珍辞書』に採録されていない古い時代の英語が多数出ており管見で 360 語に及ぶ。たとえば『諸厄利亜語林大成』に “<sup>ソン</sup>sonn × <sup>ソン</sup>son” というエントリーがあり *sonn* を *son* の同義語としている。OED (2009) で *sonn* が *son* の古い時代の綴りだと分かるのだが *sonn* は『英和对訳袖珍辞書』に採録されていない。

『英和对訳袖珍辞書』の手稿が発見されて底本が編纂作業の途上で Picard (1843) から Picard (1857) に切り替えられたのが分かった (三好彰 (2007)) が、これは最新の英蘭辞書を底本にしたいという関係者の意味込みを示すものである。その背景に英語力の高まりがある。

## 4. 邦訳中の外来語

最初に『諸厄利亜語林大成』の邦訳に出ている外来語を取り上げ、次いで『諸厄利亜語林大成』のエントリーに対応している『英和对訳袖珍辞書』に出てくる外来語を論ずる。なおここで取り上げる外来語は普通名詞である。

### 4.1 『諸厄利亜語林大成』の邦訳に見る外来語

『諸厄利亜語林大成』に 28 個の外来語が出てくる。それを語源の言語で分けると英語は無く、ポルトガル語が 14、オランダ語が 10、ラテン語が 2、フランス語と梵語がそれぞれ 1 である。一例としてポルトガルからの外来語であるパンを以下に示す。

<sup>ブレット</sup>Bread brood 麵麩 <sup>パン</sup>パン

パンのほかのポルトガル語はビイドロ、ビドロ、タバコ、ラシヤ、カルタ、ジョウロ、メリ

ヤス、キセル、サボン、カナリヤ、ギヤマン、ピロウド、ポルトガルであり合計で 14 語である。なおサボンはシャボンであり、最後のポルトガルとはオリーブのことである。現在でも使っているパンやメリヤスなどが 200 年前に定着していたのが分かる。

オランダ語はパン子<sup>7</sup>クーク、エル、カラクン、コップ、サフラン、タルタ、ハチポーズ、ビール、ビスコイト、ヘンルウダの 10 語である。このなかでコップ、サフランとビールは現在でも使われている。現代ではパン子クークはパンケーキ、ビスコイトはビスケットと英語で言い、タルタはタルトとポルトガル語で言う、そしてカラクンは七面鳥と漢語で言う。なおハチポーズはカルメン会修道士であり、ヘンルウダはミカン科の常緑小低木のことであるが、ともに日本語として定着しなかった。

ラテン語は一角獣 unicorn のユニカールと、現在でも解毒の膏薬として使われているテリアカである。フランス語はアマンドウであるが現在ではアーモンドと英語で言う。梵語のトロメンは綿糸にウサギの毛を混ぜて織った布であり現在でも使っている。

#### 4.2 『諸厄利亜語林大成』対応の『英和对訳袖珍辞書』のエントリーの邦訳に見る外来語

『諸厄利亜語林大成』のエントリーに対応する『英和对訳袖珍辞書』のエントリーの邦訳に 60 の外来語が出ている。それを語源の言語で分けると英語が 24、ポルトガル語が 20、オランダ語が 13、ラテン語が 1、フランス語が 1、カンボジア語が 1 である。『諸厄利亜語林大成』に無かった英語が一番多いのはこの辞書の利用者に英語が理解されるようになっていたことを如実に示している。

##### ● 英語からの外来語

英語からの外来語は 24 語である。その一例としてプリンスを『諸厄利亜語林大成』と対比して以下に示す。

『諸厄利亜語林大成』	プリンセス princess	諸婦人
『英和对訳袖珍辞書』	Princess, s.	女ノ侯、女王、「プリンス」ノ妃

この 24 語の中で、現在でも同じ表現で使われているのは次の 6 種である。

トン、ノーブル、プリンス、ホップ、ポンド、レジメント

現在では表現を変えて使っているのが次の 15 語である、なお () 内は現在の表記である。

ウォーク (オーク)、ヨーク (オーク)、カルロン(ガロン)、グレイン(グレイン)、ステルリング(スターリング)、ゼウ(ユダヤ)、ダエメント(ダイヤモンド)、ジューク (ヂューク)、チューク (デューク)、バルバリヤ(バーバリアン)、パルム (パーム)、ピント(パイント)、ポールト(ポルト)、マルブル(マーブル)、ヤールド(ヤード)

現在では使われていない表現は次の 3 語である、()内は英語とその現在の表記である。

フレキ(flax 麻)、ピール(peer 華族)、セスト(zest ミカン類の皮)

##### ● 英語以外の外来語

<sup>7</sup> 『諸厄利亜語林生体』と『英和对訳袖珍辞書』はカタカナのネを子で書いている。

英語の次に多いのはポルトガル語からの外来語の 20 語である。なお『語厄利亜語林大成』で「漏斗 ジャウゴ」のように漢語とカナで表現されていたのを「漏斗」と漢字だけの表現になったのが多数ある<sup>8</sup>、これらは漢語読みでなくポルトガル語読みしていたと考えられる。

次に多いのはオランダ語からの外来語の 13 であるが、その内の 4 つ（カラクン、サフラン、硝子、麦酒）は『語厄利亜語林大成』に出ており新たに加わったのは 9 語である。この 9 語の中で現在でも同じ表記で使われているものはゴムだけである。現在のブリキをブリッキ、オルゴールをラルコル、コロネルをコロ子ル、そしてリユーテナントをリウテナントと書いているのは意味が取れる。しかしインチの意味のトイム、銃の意味のカノン、カタルの意味のシキング<sup>9</sup>、臼砲の意味のモルチールは現在ではほとんど使われない。

ラテン語からの外来語であるテリアカとフランス語からの外来語である巴旦杏は『語厄利亜語林大成』にも出ている。このほかにカンボジア語からの外来語であるカボチャがある。

#### 4.3 邦訳中の外来語の総括

英語からの外来語が『語厄利亜語林大成』の邦訳に見られないが、『英和对訳袖珍辞書』では一番多い。これは『英和对訳袖珍辞書』の利用者に英語からの外来語が理解できるようになっていた、つまり英語が普及し始めていたことを示している。その背景に英学の発展がある。

なお、言うまでもないがこれらの英語からの外来語はオランダ語訳からは得られない。

#### 5. むすび

幕末に作られた英和辞書についての従来の研究は、英語の見出し語に対するオランダ語訳を英蘭辞書から得て、それを基にして蘭和辞典から邦訳を得れば事足れりとする論が繰り返されてきた(森岡健二編著 (1960) ; Nagashima, Daisuke (1993) ; 櫻井豪人 (2011))。しかしオランダ語訳が多義である場合にはオランダ語を介しただけでは英語に対応する邦語を得ることができないことが本稿で明らかになった。このことを文化 10 年(西暦 1814)に編纂された『語厄利亜語林大成』の編纂責任者だった本木正栄が 200 年も前に見抜いていたことは特筆に値する。

さらに半世紀後の文久 2 年(西暦 1862)に市販された『英和对訳袖珍辞書』もこの問題が認識できていた(三好彰 (2012b))。しかしこの問題を見逃した箇所が若干数あることから、本木の知見を継承していたのではなく再発見だったと考えられる。

さらに『英和对訳袖珍辞書』では底本である Picard (1857) に見られない自動詞と他動詞の区別がなされている。そして邦訳の中に英語の発音に拠ったカタカナ英語が多数みられて英語が生活の中に入り込んでいたのが読み取れる。考えてみると『英和对訳袖珍辞書』が発刊されるに先立つ文久元年(西暦 1861)に欧米でもはやされた Lindley Murray 著の上級者向けの

<sup>8</sup> 漢字だけの表現になっている外来語を書き上げると、煙管、石鹼、莫大小、煙草、金剛石、骨牌、牌子、胆八樹、羅紗、硝子、麦酒である。これらの漢字表現の多くは現在でも使っているがパンの「蒸餅」とオリーブを指す「胆八樹」は今では通常使わない

<sup>9</sup> カタル (Catarh) に対応するオランダ語は *zinking* であるが、これをシキングと訳しているのはシンキングを誤記したものであろう。ともかくオランダ語に拠っている。

英文法書が英文のまま『英吉利文範』(宮崎元立(1861))として民間の書肆から翻刻刊行(三好彰(2012a))されており、その編纂者の宮崎元立が『英和对訳袖珍辞書』の校正に参加していた(三好彰(2011a))。そして『英吉利文範』と『英和对訳袖珍辞書』はほぼ同数が現存しているので同程度に利用されたとみなせる。(三好彰(2013))。

『諳厄利亞語林大成』から『英和对訳袖珍辞書』への幕末の半世紀の間に英学は着実に力を付けていた。

## 参考文献

Bomhoff, D. (1851) *A new dictionary of the English and Dutch language*, Nimmegen

勝俣銓吉郎(1936)『日本英学小史』東京:研究社

古賀十二郎(1947)『徳川時代に於ける長崎の英語研究』福岡:九州書房

Holtrop, John (1823-1824) *English and Dutch dictionary*, Nederduitsch en Engelsch woorden boek, Dordrecht en Amsterdam

堀達之助編(1862)『英和对訳袖珍辞書』江戸:洋書調所

宮崎元立(1861)『英吉利文範 二編』江戸:老皂館

三好彰(2007)「新発見『英和对訳袖珍辞書』の草稿および校正原稿の考察」『英学史研究』40:87-103

三好彰(2011a)「宮崎元立と英学」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要』5:34-43

三好彰(2011b)「『英和对訳袖珍辞書』の文法関係邦訳語の考察」『東京大学言語学論集』31:101-115.

三好彰(2012a)「宮崎元立と英学(続)」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要』6:39-50

三好彰(2012b)「『英和对訳袖珍辞書』の構成法の考察」『東京大学言語学論集』32:67-84.

三好彰(2013)「宮崎元立と英学(続々) 生麦事件と『英吉利文範』を中心に」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要』7:23-37

本木庄左衛門(正栄)編(1814)『諳厄利亞語林大成』長崎

本木正栄(1982)『諳厄利亞語林大成 草稿』(長崎市立博物館所蔵本の複製)東京:大修館書店

森岡健二編著(1960)『近代語の成立 明治期語彙編』東京:明治書院.

Nagashima, Daisuke (1993) “Bilingual lexicography in Japan: the Dutch-Japanese to the English-Japanese dictionary”, pp. 249-255, *World Englishes*, Vol. 12, No. 1

名雲純一編(2007)『英和对訳袖珍辞書 原稿影印』高崎:名雲書店.

日蘭学会(1994)『オランダ語辞典』東京:大修館

OED (2009) *Oxford English Dictionary, Second edition on CD-ROM Version 4.0*, New York; Oxford University Press

Picard, H. (1843) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages: remodeled and corrected from the best authorities*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.

Picard, H. (1857) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages*, 2d ed., rev. and augm. by A.B. Maatjes, Joh. Noman: Amsterdam

櫻井豪人 (2011) 「『英和对訳袖珍辞書』初版草稿の諸相と蘭書の利用」『日本語の研究』7(3):17-32

Sewel, William (1766) *A compleat<sup>10</sup> dictionary, English and Dutch, to which is added a grammar, for both languages*, kornelis de Veer: Amsterdam

柴田篤志 (2011) 「『語厄利亜語林大成』における動詞の考察：動詞の表記方法についての分類と検証」『関西英学史研究』6:67-82

杉本つとむ (1978) 「フランス語の学習と辞書訳編」『江戸時代蘭語学の成立とその展開』東京：早稲田大学出版部

---

<sup>10</sup> この *compleat* は *complete* の当時の綴りである。

# Considerations of the Study of the English Language in Japan during the First Fifty Years following the Prototype of the English-Japanese Dictionary Compiled in 1814 to the First Commercialized English-Japanese Dictionary Published in 1862.

Akira Miyoshi

**Keywords:** English-Japanese dictionary, English-Dutch dictionary, Compilation Method of English-Japanese Dictionary

## Abstract

Dutch was the only western language officially allowed to be studied in Japan from the early seventeenth century until 1808, when English was also approved. As a result, it has been hitherto considered that in the first prototype English-Japanese dictionary (1814) and in the first commercialized dictionary (1862) that all Japanese words in those dictionaries were obtained by translating through a corresponding word in Dutch.

However, Shoei Motoki, chief compiler of the first prototype of the English-Japanese dictionary, indicated that there are some instances where it is not possible to get the proper Japanese word by translating from English to Dutch, and then into Japanese. Yet, Motoki did not specify for which words this translation path was not possible. This paper makes clear the method for obtaining the correct Japanese word in such cases.

The problem has also been successfully solved in the first commercialized English-Japanese dictionary. Thanks to intense study of the English language in the earliest fifty years, skills such as a profound understanding of English words and their parts of speech have been accumulated to make the dictionary more practical.

(みよし・あきら)